

介護分野における技能実習生の職場への定着プロセス ーベトナム人技能実習生へのヒアリング調査よりー

○早稲田大学人間科学学術院 古山 周太郎 (9120)

キーワード：外国人介護労働者・技能実習制度・職場定着プロセス

1. 研究目的

現在、日本全体で介護の担い手不足が深刻な問題となっており、その解決策の一つとして、外国人技能実習生の受け入れが政策的に進められている。2017年の「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律」により、制度の対象職種に介護職種が追加され、外国人技能実習生の受け入れが本格的にはじまった。

外国人技能実習生が介護職として働く際には、コミュニケーションや介助の現場で様々な課題に直面する。特に、外国人技能実習生の出身国では、高齢者及び障害者への社会的ケアは進んでおらず、介護自体の理念や具体的な技術について学ぶ機会がほぼない。また、外国人技能実習生は、出身国で日本語を学ぶ期間も短く、簡単な日常会話ができる程度の語学力で来日する。本研究は、本格的に受入が開始された介護分野での外国人技能実習生の受け入れに着目し、技能実習生及び彼らと働く日本人スタッフへヒアリング調査を行うことで、技能実習生の仕事の取得や職場環境への適応を通じた職場定着プロセスを把握することを目的とする。さらに、外国人技能実習生が感じる仕事のやりがいや、介護福祉への理解がどのように生じるかについても明らかにする。

2. 研究の視点および方法

調査の対象者は、ベトナム人技能実習生3名及び同実習生の技能実習指導スタッフである。対象とする事業所は、社会福祉法人Aが運営する小規模多機能型居宅介護（定員25名）及び認知症対応型共同生活介護（定員18名）の事業所と、障害者の生活介護事業所（定員25名）である。調査の方法は、1時間程度の半構造化面接を実施した。技能実習生についての調査項目は、①仕事の状況、②職場環境、③日本語学習やコミュニケーション、④利用者との関わり、⑤日常生活や余暇の5項目、実習指導スタッフに対しての調査項目は、①実習生の仕事や職場での状況、②実習生のコミュニケーション、③教育指導についての3項目である。調査は技能実習生が計4回（2020年2月、2020年10月、2021年3月、2022年3月）、実習指導スタッフが計2回（2020年2月、2020年10月）である。

3. 倫理的配慮

調査開始にあたっては、ベトナム語の文章を用いて調査主旨を説明し、調査協力について承諾の同意書を得た。個人を特定できる情報についての保護を徹底し、収集したデータについては厳重な管理のもとに調査を実施した。なお本研究は、早稲田大学「人を対象

とする研究に関する倫理審査委員会」の実施承認を得ている。【承認番号 2019-316】

4. 研究結果

第1回目のヒアリング(20年3月)時は3名とも働き始めて2~3か月での実施であった。仕事について、高齢者の事業所で働く人は「レクリエーションをして、彼らを楽しませることができている」、「スタッフの方に手伝ってもらい、仕事になれてきた」や、障害者に対して「同じ世代のひとたちで、一緒に遊んだり、歌ったり、おもしろい」と初期の段階から仕事に楽しみを感じていた。利用者との関わりも当初の想定よりうまくいっているとの自己評価であった。日本人スタッフからは、仕事に対して前向きで積極的に取り組んでいる姿勢が評価されていた。一方で日本語のコミュニケーションは、利用者の発言や職場のミーティングの内容がわからないといった課題を抱えていた。第2回目(20年10月)になると、身体介助ができるようになり、「食事介助も食べられない様子ときには相手のペースにあわせられる」など、利用者の行為のリズムに合わせた介助ができると自己評価している。日本人スタッフも同様に感じており、より質の高い介助を目指した指導を行っていた。仕事の課題としては日誌の記入や読解、また他職員への仕事の受け渡しの伝え方などが挙げられている。日常生活については、買い物に加えて余暇には近郊への外出などもするようになっていた。第3回目(21年3月)になると、仕事でも夜勤に従事するようになる。そうすると「夜勤は不安で、寝ているときに急に何かあったら困る」など、事故などへの対応を少人数で行うことを課題と感じている。ただ普段の仕事は2年以上続けるなかで、利用者ともコミュニケーションをとれるようになり、「食事の介助の時、利用者がむせこみそうだと表情で判断できるようになった」といった先回りの援助ができると自己評価をしている。また仕事の際にも「支援して利用者が幸せそうにみえるとうれしい」など、介護に対するやりがいを感じている。第5回目(22年3月)になると、職場環境にも慣れて「利用者スタッフの考えていることがよくわかるようになった」と、仕事上の連携ができているとの自己評価や、「表情からニーズを読み取れて前より仕事が好きになった」など利用者との関係性が構築できていると感じていた。3名とも日本語能力試験N2に合格し、日常のコミュニケーションに問題はないと感じているものの、丁寧語や尊敬語について、特に利用者さんへの対応の時の使い方が課題として挙げられていた。

5. 考察

介護職の外国人技能実習生は、他職種と比べて必要とする要件が高く設定されるため、本人のモチベーションは高い。本研究からは、介護の仕事現場で慣れながら覚えていき、段階的に仕事のやりがいを得て職場に定着していくプロセスが明らかとなった。しかし、日本語能力については専門用語を交えての職場で使用や、利用者とのコミュニケーションなど、その習得に一定程度の期間が必要である。今回の事例から、本人の学習努力が前提となるが、おおむね2年半程度でほぼ問題なく介護の仕事こなせるレベルまで達しており、環境と条件を整えば、外国人が介護の職場に定着することが充分可能であるといえる。